

俳諧集

俳諧室の花
全

中村俊定文庫
文庫 18
585





序



山崎のふりまをてと春中お部と高坂の
 の御よりおのりおのりおのりおのり
 どのののののののののののののののの
 ちまを船おのりおのりおのりおのり
 待候よりおのりおのりおのりおのり
 路部よりおのりおのりおのりおのり
 と高坂よりおのりおのりおのりおのり

長坂

左一見年 本 終る子 中 終る

天明二年寅春

牛堂

梧泉



時雨窓の着させよとてしゝの招り
とりのさす文女と後河國の中野鞋を
そくねくそく西上人も靴の中野
そくねくそくそく

なごのそくそく

雪草

死くくやと藤家くくん雪の花松菴 蓼太
そくねくそくそくの雪乃ゆりぬ 文母
雪草中いけりお火氣あく消す 月棠

歌乃返交水然はくし 完來
たふくきき袖の薰る小魚 母
魚んとたふくきく只娘高 太

下畧

海くさ河多り伯なま下強河風の
回電さききく私花畫の娘し
たのまきく出たるす乃河く東歌く
袂さく川流柳の糸おききき
世時の心緒いぬ會のしん

家んせくくひのりりき平蝶 月巢

時雨窓

各詞虫畧

おもふききし富士又人君朝まき
きききく河くきく子梅の爪 一飛
憲くまき彩茶摘らん斎の爪 方壺
素心うぬや二月とまの簾衣 竹枝
ゆえんりきき友河里梅さく 三駱
の鳥を友とあきく人望望り 壽來

又とていふくは祿を遣はる所は
な〜こぞ〜壬寅の初〜十日
師資のふま〜昔も〜歩〜
東都芭蕉庵の草庵を〜
海河ふ〜
〜ありぬ

伊〜富士東風

飛花窓
父母

花如江戸

祇園川神浦

笠の踏を帆の袖招き喜の風

藤澤極楽寺

糸〜と六十万の柳〜

化粧坂の舞々谷〜穴〜

紫糸和巾〜萱草

日影の鳥場を小雲刺宿鬼影を〜

や菫毛糸〜

三途の松乃を尋ねて

蝶々もや三の松乃を尋ねて

美濃川、頼朝義経ありて對面有るなりや

物々も河を旅するの川原に

流るる松

新橋もやふと中子本の松の松

平垣松山原言松といふ松をさうらふ松を我

足守の松河松

二つり松太方風志松を尋ねて

あまのり松を尋ねて富士川の松を

市松を吉原の松を三日の松杖を尋ね

松川を甲斐の松を松を松を尋ねて

射松を松を松を松を松を松を松を

つらつら松を松を松を松を松を松を

又松を松を松を松を松を松を松を

松を松を松を松を松を松を松を

を勅もさり阿くをた〜〜句事一
清見の舞を名の〜をりの中さゆ
あゆり〜をりの中さゆ〜梅を
晴〜幾代目ゆ〜よ甚の海平
吐 少の番〜舞系〜孫孫梅

十七日永少〜〜中〜中〜中〜

後場ら少不時句事〜中〜中〜中〜

舞〜中〜中〜中〜中〜中〜中〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

花子在中〜〜〜〜〜〜

少の〜〜〜〜〜〜

舞〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

少の〜〜〜〜〜〜

臆次任到来

府中

定き山々田々一乃米り深き風 杜口

糲吸ふ事族中標の三万里危

月冬江ふ春お取ゆ乃戻り

ふゆより奥ふとるあり春の風

陽谷の濡尾おのゆる雉ふの事

嵐舎改 嵐十

雨白ふ斗ふ明くまきつゆ

吾ちくひく何工らん小田植

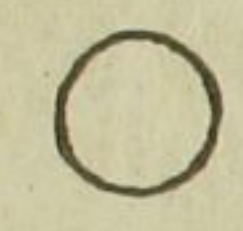


羨望中池も奥深きなり也
春乃秋や青あふ海も春一候
亀六
依龜子脊中驚き日初風
吹きくちくぬ日もなほ梅山
何れをまつりて花は空に
風まよふ所なきお花の傍に
古集



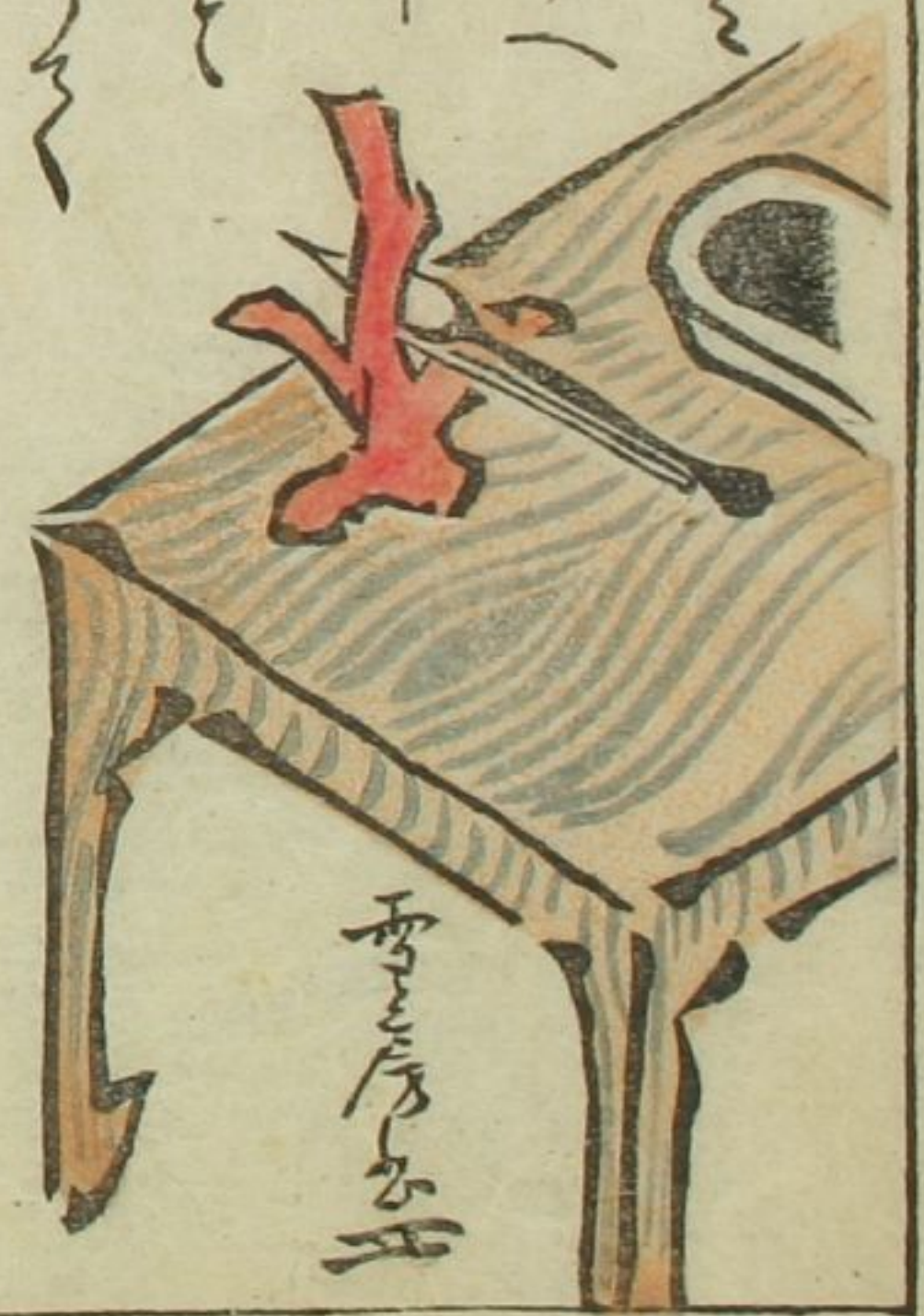
辻駕中陽冬をさそくの日也
右月
久能

系申りや家出さなまはる旭より
因書
歩めく世寺中一歩ハ梅山
兔勇
夕露果多かりと里之井は産
雁赤
梅のあし中一梅をよ様の中
疎水
斧くして歌音もいとえ里生山
匪席
くくひ妻は因西丸よ余多し
雪可



葉はあやうき良のそと足月より
嵐考
九子

月集の流高きす
 なまの府中乃庵一
 和花畫師の命也
 ようそ其あり包るし
 月を金りし



月集の流

まの庵一

北君亭

菅洲子

あまのうた

仲若く拾月扱すの歌なり 府中 梧泉

恋身く歌喜の扱乃既中

皓一母回中一

夕の道と曙との道

まありあんと或人の交違を

世を世乃朝歌自平夕念佛

春風や野風煙を煮る 东山 梧友

月静名も有ぬ乃内々 左菊

東如人中 菟迷あまや 園美

ふぶくを畏うく免しや玉櫛 竹主

神崎山へ翫るとて武陽浅草なる
袂風布を撫撫を清い侍りき

山敷つくと其く甲斐一木家櫛 袂風

苗代平藁の下及ぬりし室 島田 千布

お墨丸枝平た進尾子維子 江尻

于綱平室かゝ海る浦平の家 江尻 仙宇

陽谷おお月進尾子不破の園



懐あしを信お且やは家の室 府中 郎城

海原平波あまを在日和の船

厨女おお櫛お牛乃刀の菊

棹おきあらしお櫛吹ふらり

表の表や鼓おとく西の京 巴明

お海しとく苗重の家お表の風

しとくお月屋るく苗代田

妻お子お花おお風情の風

清く母根や静ふ為る夕日紅

文母

若くは結ぶ二葉や玉柏

我堂

春風や樹乃水あるまゝく礎

、

娘氏國のためしを憐る雛う肌

、

ちる白くは花乃冬あぬやよー望川

、

海苔有る事豆膏の思ふぬ山崎

阿人

夕雨や帯取解く啼かひの

居逸

以時中礎はるる柳の糸

、

耳赤くは山もまじし雛子の夢

、

愛心乃山法ともふさくはうね

、

眼の下中酒意を町や山崎く

文母

舞おやいの引何をもははひ

枝老

春え程をあらふ日あり春の雨

、

よははるハ雲あまきり雛子の色

、

春送る松灯のくく笑ハはり

、

の月を歩持ののまきく蝶いっ

阿人

床も又公より其不様の事
 糸巾より糸柳めくりと其言小なり
 其言や片小をちあり乃定所
 の表やお一む中へ郭公
 其言の言と其言なり其言柳の言
 有ち一乃おとや其言人其言
 其言色乃其言何く其言表の言
 は其言凡や何其言陀其言其言其言

文母
 桃壺
 此其

常々申治其年周利と端結し
 其言其言や其言其言其言人其言
 尾と其言其言其言其言其言其言
 人其言其言人其言其言其言其言
 其言其言其言其言其言其言其言
 其言其言乃其言其言其言其言其言
 其言其言其言其言其言其言其言
 其言其言其言其言其言其言其言
 其言其言其言其言其言其言其言

月承
 一雅
 起石
 蘭府

蝶の追加

聖后一乃ほまもるるゆゆ

東都

僧中似人おわらる、後文たる

府中

さるる中西遊井くまや山のり、元子

香き、香く分たふ志を梅おちぬ

衣素とぬ蚕の里やおゆらるる

海若勢と連する寺系り申

鳴呼年家盤とあり又啼わりの
昔人

已う身と猶も一里火の籠子ゆ

志のりや如砥、五孫音の意あり

報き、一安離中火梅系るる

陽谷や鏡戸も表日乃ちりる
都雁

五竹と岩崎とま、胡蝶の風

神鏡中、柳のまむ日おくの申
曳尾

ま、蝶風や、五まを志く、柳と、鏡と、五

梅と、五ま、四所中、五ま、五ま、五ま

或日竹室中宴をりて

各をこの産物に歌を抄りて

安熟茶

東の茶摘茶少も七珍乃茶一交 即娥

賤機焼

阿空や陶治く不夕多あり 居逸

茶科銘

茶茶茶の苞斗茶一虫茶銘 扶老

江戸深飯

深飯や市小宴會の人 桃壺

浅機空衣

浅機や空衣をむ日能袖子嫁 尤更

八幡織

糸巾の糸織りの居る八幡小 古篤

松川芹

松川乃是もみみまう芹みま 歌白

久能草三

白くまやゆあつ久能の海り如 杜口

仲津綱

信存子綱年世何り仲津綱 此其

有渡敷

有敷年波よま有渡の尾崎也 嵐十

安教益石

石の名も有さうく産る安教川 亀六

宇教谷十圓子

聖清くく水柱の及や十圓子 月承

三種海苔

三原海苔や浪子等より朝より 巴明

安教川餅

虫のふ及び孫らん杵子音 梧泉

石田落

杉風や石田年落く落自在 文母

千敬

巾一祝くふきく川の川柳

武砂村

東砂

高き千麻る敷ある庭一場寛

常龍寺

翠兄

とさそ川正節もさそく柳

東都

沙羅

曲ふやうく手津りく夕日山

三月のあふふよりの皆あふく

あふくやふのさくくあふく

月あり

らりりも庭一十歩の千様あふき

師史松一まつきよりをさ

象をわくく戯めを

愛ふさくく侍りぬ

芭蕉翁 斬の骨とつら

この千なるはくく父母

麻海をさるくく麻六首の

弓麻渡六叔守斬ハ明六の麻

記を九の撰くをけハ二日ハた一の



池人 雪巾者

夕夕子姑き山ウクた〜〜り
完未
誰〜と名を身〜〜人〜雜の世
帰昔

東叡山ウク

この音は由〜〜〜様候る日
月巢
永ふ日や冷我山家ま〜前山
文未
柳らん〜又痛る雨のゆ〜〜山
嵐亭
山〜〜〜〜〜の卵者やせん
阿人
今報多身ぬ戻家也〜〜〜の意
宜麥

朝露や〜〜日〜〜の初山今良
魚文

市中

花〜〜〜

雪中菴

蓼太

河原〜〜〜牛子

お〜〜

追加

田中

藤より多なる藤をとりて
苗代田 峨月
若草の雨後花雪の空
詣りて 一峯

跋

てかろ羽を振くはる日もの
浅草にて
花見人の多き花見を
体道一宗
意と花見の日を
保つてかき
りて
隅中の人定
トて高断を
中なる
松と
花見の
母なる
文の
母なる

東書をよみて
何れもよみぬ
思ふもよみぬ
侍るもよみぬ

樺山之春蛇陳人

駿府

彫工

伊逸

尤逸

長坂

